

何発もお尻に鞭を入れた。

ボールギャグの空気穴からよだれが落ちて、アイマスクが涙でうっすらと滲んでいる。

空気を切り裂く鞭の音が聞こえる度にひなちゃんの体が強張る。

「…っ…！むぐう…！」

何発鞭を入れたのか数えていない。

突き出したお尻は赤く腫れあがり、蚯蚓腫れが走っていた。

「ひなちゃんはオナニーして気持ち良かったの？」

「むぐっ…んー！んー！」

バシン！

「んぎいっ…！」

「答えてご覧？おまんこヌルヌルにして…クリトリスを擦ってイッたのかな？」

シュルッ！      ビシッ！

「僕が何も知らないと思ってたら、大間違いだよ？ひなちゃんがオナニーしてることはよく知ってたんだからね！」

足をガクガクさせて、もう立っているのもやっとなひなちゃんのお尻に一発平手打ちする。

「んぎいっ！」

鞭とはまるで違う手のひらの感触に絶叫すると、崩れるように膝をつく。

ひなちゃんの手錠を解いてアイマスクを取ってやり顔を覗き込む。

よだれでドロドロになったボールギャグを外してやると、肩で息をした。

顔中を涙と鼻水でドロドロにしながら、僕の顔を許しを請うように見つめてくる。

「ねえ、答えてくれなきゃ分からないよ？どうだったのかな？」

「…っ…んひっ…ひっく、ひっく…」

ひなちゃんはしゃくりあげで顔を覆って泣く。

「答えなさい。どうだったのか聞いてるんだ。」

「…き…よ…ひっく…きもち…っ…いや…いやああ…」

「いい加減にしろ！」

ひなちゃんは小さな体をビクッと震わせる。

今まで妹に言い放ったことのない口調に自分でも少し驚く。

許しを請うようなひなちゃんの顔が、僕の嗜虐心にますます火をつける。

「ご主人様の命令にも従えない、質問にも答えられないような奴隷にはお仕置きが必要だね。」

「ほら、お尻をこっちに向けてお尻の肉を手で広げて肛門を見せなさい。」

ひなちゃんを別荘に連れ帰り、庭のベンチに後ろ向きで四つん這いにさせる。

戸惑うような手つきでゆっくりと自らの両手で広げ曝け出されるひなちゃんの肛門。

「どうしてお仕置きされるのか、今から何をされるのか大きな声で言いなさい。」

僕の側にある小さなテーブルの上には数個のイチジク浣腸。

「ご主人様のご命令にひなこが従えなかったから、今からお浣腸のお仕置きをされます。」

隣にいる僕によく聞こえる消え入りそうな震える声。

「大きな声で。と言っただろう。やり直しだ。」

「ご、ご主人様のご命令に…ひなこが、した、従えなかったから…！今から、お、お、お浣腸のお仕置きをされます…！」

さっきとは違う大きな声に僕の顔は勝手に笑顔になった。

「浣腸のお仕置きをひなちゃんの口からお願いしなさい。」

「…ッ！…は、はい…」

ひなちゃんの口から溜め息が溢れる。

「ご主人様、ひなこにお浣腸のお仕置きをお願いいたします…」

「よく言えたね。」

イチジク浣腸の小さな容器がひなちゃんの肛門に挿入する。

「まずは一個。」

容器を押しつぶして体内に薬が入っていく。

「むぐう…」

初めての浣腸の感覚に思わず身じろぎをするひなちゃんの体を押さえつけて、二個目を挿入する。

「これで60cc、全部で300ccは入れるからね。」

「そ、そんなに…？」

「お仕置きだからね。ひなちゃんは罰を与えられるんだよ。罰が軽かったらお仕置きじゃないだろう？」

零れたグリセリンで肛門の周りが光っている。

僕は医療用のゴム手袋を嵌めた手でひなちゃんの膣口から肛門にかけてをゆっくりと一本の指でなぞる。

「んひいっ！」

そのまま昨日犯したばかりの膣の中で指を抜き差しする。

少々きつかったが愛撫しているうちにトロリと愛液が漏れて僕の指に絡んできた。

三個目、四個目…立て続けにひなちゃんの肛門は浣腸液を飲み込む。

「あと半分だよ。お浣腸を全部入れたら、栓で蓋をしてから沢山可愛がってあげるからね。」

空になったイチジク浣腸の容器をひなちゃんの目の前に捨てていく。

「少しお腹が変な感じになってきただろう？」

うっすらと額に汗を滲ませて、首を小さく縦に振る。

「気持ち悪い感じかな？気分はどう？」

「…変な気分です…お腹も…」

疲れただろうと腕を優しくほどいてやり、ベンチを掴ませ楽な格好にさせた。

勿論、肛門がよく見えるように足を大きく広げさせる形を取って。

「お浣腸もなれば気持ち良くなるよ。」

「うそ…そんなのありえない…」

「今度ひなちゃんの為に浣腸器を買ってあげようね。病院で看護婦さんにされるみたいに、お尻の穴に一度に沢山お薬を注ぎ込めるんだよ。」

ひなちゃんの目の前に10個目の空のイチジク浣腸の容器が置かれる。

「ご、ご主人様…お願いします、おトイレに…」

額の汗は脂汗に代わって、ひなちゃんは昨日のおもらしする前のような表情になって僕に哀願してきた。

可愛い顔が苦痛にゆがんで、唇はかすかに震えている。

300ccも肛門に薬が入ってるんだ。もういつ脱糞してもおかしくはないだろう。

「まだお仕置きは終わってないよ。これでお尻の穴に栓をするよ。」

僕の手には、ひなちゃんに絶対似合うだろうと思って買っておいたピンク色の可愛いアナルプラグが握られている。

持ち手の所に小さな鈴が付いていて、手の中でチリンチリンと音がした。

ローションをつけて、ゆっくりと肛門に挿入していく。

「絶対に僕が良いっていうまで漏らしたりなんかしたら駄目だよ！」

「…んんう…っ…はあ……」

アナルプラグを施されたひなちゃんは脂汗をだらだらと垂らしている。

そんな苦しくて切ない表情を楽しみながら、僕はひなちゃんを可愛がる。

ベンチの上で仰向けにさせて両脚を大きく広げさせ、

足を閉じられないようにベンチにロープで固定した。